

明日 への 話題

母をたずねて 三千里



シテイグループ証券
取締役会長

ひがし しゅん た ろ う
東 俊太郎

名作「母をたずねて三千里」の、少年マルコは、出稼ぎの母を訪ねてどこからどこへ旅に出たかご存知でしょうか？イタリアのジェノバから、アルゼンチンのブエノスアイレスというのが正解で、19世紀末のアルゼンチンは農業国として大発展を遂げた有数の先進国だったようだ。アルゼンチンは、その後の工業化の波に乗り遅れて没落し、現在は一人当たりGDP60位前後の地位に甘んじている。このように、時代の変化に対応できないと大国とはいえ、あっという間に衰退してしまうのが歴史の教訓である。

日本もその二の舞になってしまうかもしれない。「日本経済没落論」も昨今頻繁に聞こえるが、今日、わが国は未だ豊かで、沢山の外国人労働者の出稼ぎの場になっている。しかし、彼らと呼び込むことのできる経済力が何時まで続くのだろうか。22世紀になって、「100年前には、中国から、日本に、多くの中国人が出稼ぎに行っていた」と聞いて、世界中の人が驚くのもかもしれない。

筆者は、日本のメガバンクに長らく勤めた後、2年前からシティグループに籍を置いている。本年度創業200年の真のグローバル企業で働いてみると、グローバル化度合いのすごさに驚きを禁じえない。160カ国に及ぶ業務を支えるグローバルシステムが構築され、そのシステムを使い日々の業務を行うための世界的に統一された各種業務マニュアルが存在している。シティグループの世界標準を画一的にどこにでも押し付ける気はないが、英語が話せれば世界中どこの国でも直ぐに働くことができる。時差と地域を超えてのコミュニケーションをブラックベリーと電話が解決している。重要な会議に出張先から携帯電話で参加するなどは正に日常茶飯事。フィジカルな出席をもってお行儀とすることはない。休暇先からの参加も当たり前。

ところで、欧米の大手金融機関は、会社全体がグローバルであるため、国際部なるものは存在しない。国際部が存在するのは、グローバルでない証拠である。日本の金融機関が国際部を廃止し、インフラを更に整備し、真のグローバル化を目指さない限り、凋落が続くような気がしてならない。